

青森調査参加の記——養護施設「弘前愛成園」訪問記

宇 都 榮 子

はじめに

日本原燃株式会社六ヶ所原子燃料サイクル施設他の調査は、大変興味深いものであったが、これらについての他の所員の方々からの報告に、私がつけ加えることもないと思われる。そこで、帰路、この貴重な青森調査参加の機会をいかして立ち寄った社会福祉法人弘前愛成園のことについて述べることで責めを果たしたい。

弘前愛成園については、かつて「慈善館」と称する常設映画館を所有し、その収益を施設の運営費用にあてるというユニークな経営方法をとったことのある社会福祉施設として記憶して

表1 入所措置理由

措 置 理 由	件 数	
親 の 死 亡	父	6
	母	3
	父 母	0
親 の 行 方 不 明	父	1
	母	12
	父 母	0
親 の 離 別	6	
父（母）の長期拘禁	5	
父（母）の長期入院	9	
父（母）の就労	18	
虐待・酷使	3	
放任・怠惰	6	
父（母）の性格異常・精神障害	10	
季節的 就 労	8	
そ の 他	12	
計	99	

資料：「平成7年度 事業計画書」弘前愛成園

表2 保護者の状況

保 護 者	入 所 時
実 父 実 母	8
実 父	31
実 母	43
養 父 実 母	3
実 父 養 母	1
祖 父 祖 母	3
祖 父	0
祖 母	3
伯父伯母（叔父叔母）	7
姉	0
計	99

資料：表1に同じ。

おり、かねてから訪問してみたいと思っていた施設の一つであった。そこで、大鱈温泉から弘前に出ることにした。大鱈温泉の宿の人に愛成園のことを聞いたところ、昔、大鱈にも愛成園の保養所があり、皮膚病などに悩まされていた子供達が温泉に入って保養していたこともあったと話してくれた。また、慈善館にも映画を見に行ったこともあったそうだ。この時は、地元の人びとによく知られている施設なのだなあとの印象を持った。

7月28日、他の人びとと別れて一人弘南鉄道に乗り、西弘前駅をめざした。西弘前駅の駅員さんに愛成園への行き方を尋ねたが、よくは知らないようだった。大鱈温泉の宿の人とは異なり、弘前市の中心部に近い駅の人にとっては、愛成園は今や数多くある社会福祉施設の一つであり、日常的にはあまり聞く機会もないのかも知れなかった。弘前名物の一つだった慈善館も、1966（昭和41）年には閉館しており、弘前愛成園の事を知る人も少なくなっているのかも知れない。

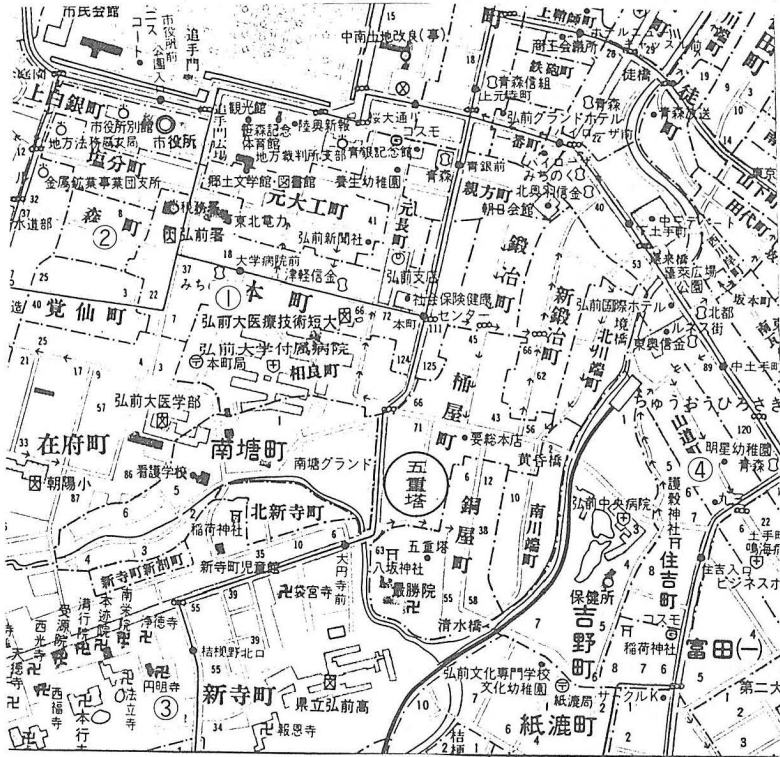
ともあれ、今は弘前市豊原に位置する弘前愛成園に無事到着、現在の施設の様子を伺い、見学させていただいた。といっても、私が見学したのは、親の離婚や、家出、行方不明、長期入院、死亡等々により適切な養育者がいない状態の子どものための施設、養護施設弘前愛成園だけである。1995年3月1日現在の在園児童は表1に見られるような理由で入所、入所時の保護者は実母43.4%、実父31.3%となっている。子どもたちの親は行方不明でいないのと同じ（表2参照）という場合もあるが、両親が死亡したり、親が誰であるか不明であるというような子どもはほとんどいないようである。

育児院から発足した弘前愛成園は、現在、乳児保育所、保育所、養護老人ホーム、在宅介護支援センター、デイサービスセンター、特別養護老人ホーム、養護盲老人ホーム、老人福祉センター、養護施設と、乳児からお年寄りにわたってサービスを提供する法人となっているのである。

東北育児院創立

1902（明治35）年11月3日、弘前愛成園は、弘前市本町1丁目に、東北育児院として佐々木五三郎によって創設された。その設立当時のことについて、五三郎は「其の年は天候不順で秋に至るも五穀稔らず、県下をあげての惨況に陥ち官民挙げてその救済に勞せるも是を医するに足らず。その反面貧困孤児の路頭に徘徊して食を求むる者いよいよ多く窮乏の状迫り、心ある者をして涙を催さしめたのである。然れども我県下には未だ此の年の孤児を收容して救済加護する機関設備なく、茲に不肖奮然身をもって此の事業に尽力せんと決心したる所以也」【三浦昌武他編『社会福祉法人弘前愛成園史』社会福祉法人弘前愛成園（以下『愛成園史』と省略）、1967年、7頁】と述べている。1902年は天候不順で、1869（明治2）年に次ぐ凶作で、県下平

図1 弘前愛成園創設時から現在までの位置



- ① 東北育児院 (明治35年)
- ② 森町の薬種商の店
- ③ 東北育児院 (明治38年)
- ④ 慈善館 (大正3年)
- ⑤ 弘前愛成園 (昭和22年～)

(野砲兵第八連隊跡地)
 ※現在地以外は町名の一致する場所にマークしたので正確な場所ではない。

均反収6斗2合余(約1俵半、約90キロ)であり、これは平年作の半分であったという。弘前は平年作、中・南津軽郡は7分作で難を免れたが、南部地方には皆無作のところもあり、多くの農民は困窮した(弘前市史編纂委員会編『弘前市史 明治・大正・昭和編』復刻版(以後『弘前市史』と省略)、1973年、名著出版、255頁)。

1923年(大正12)年末現在、内務省所管社会事業施設のうち、1907(明治40)年までに設立された児童保護施設は206施設であり、東北育兒院のような育兒事業をおこなう施設は106施設と、その半数を占めていた(池田敬正『日本社会福祉史』法律文化社、1986年、342頁)。戦争、震災、飢饉などによる生活困難のなかで孤兒や棄兒が増えたことに加えて、この時期になると、横山源之助著『日本の下層社会』に見られるように貧困問題を社会問題としてとらえる様になってきており、また池田の指摘するように民間における慈善思想のひろがりの影響もあったかと思われる。

石井十次の影響

こうした施設創設者の中で、多くの若者に影響を与えた人物に石井十次(1865~1914)がいる。彼は、城山三郎著『わしの眼は10年先が見える 大原孫三郎の生涯』の中で、実業家大原孫三郎の人生を決するキーパーソンとして登場しているから、すでにご存じの方もいるかと思う。石井十次は、宮崎県高鍋町の出身で、岡山医学校での医学勉強の途次巡礼の子どもを預かって養育することになり、やがて孤兒救済が自己の一生の仕事だとして、医書を焼き医学の道をたち、岡山孤兒院での孤兒救済に専念した人物である。子どもの頃、修身の教科書に登場してきた石井についてご記憶の年代のかたもあるかと思う。岡山孤兒院は1887(明治20)年設立された。

今日、社会福祉施設は措置費と呼ばれる委託費を受けて経営されており、施設運営費用の8割から9割方はこの措置費でまかなわれている。ところが、岡山孤兒院、東北育兒院が創設された明治時代には、こうした公費助成はなく、成績優秀な施設に対して、わずかに内務省奨励金や各県の補助金、天皇からの下賜金があったにすぎず、各施設の運営費用の中にそうした奨励金等の占める割合も低かった。従って、施設を維持運営していくには大変な努力が必要であり、施設従事者の約半数は、資金募集にかけずりまわらなければならなかったのである。

石井十次は、子ども達をどのように養育するかについて日夜考えており、ルソーのエミールに学んだり、イギリスのバーナードホームの小寮舎制度を用いた家庭的な運営方式にヒントを得て小寮舎制度をとり、当時としては高学歴の女性を保母に採用、母親としての役割を担ってもらったりしている。また、施設維持の方法についてもいろいろ工夫しており、賛助員方式による賛助金募集、慈善音楽幻灯会方式による資金募集等を行っており、こうしたやり方に影響

を受けた者も少なくなかった（『石井十次日誌』石井十次記念友愛社、柴田善守『石井十次の生涯と思想』春秋社、1964年）。

石井は事業の資金獲得と宣伝のため慈善音楽幻灯会を組織し、全国各地を巡回興行していた。1900（明治33）年6月から10月にかけて関東、奥羽、北海道各地にかけて長期の巡回興業を行ったさい、弘前にも立ち寄り、10月3～5日にわたって興行した。佐々木五三郎は、この時石井の講演を聴き大変感動したという（『愛成園史』7頁、弘前市教育委員会編『弘前市教育史下巻』（以下『教育史』と略）弘前市教育委員会、283頁）。

この時、石井十次の講演の聴衆となったことが、五三郎を孤児救済に向かわせる原動力の一つとなった。石井十次は、大変情熱的な演説をする人であったらしく、人をひきつけてやまない魅力があったらしい。彼の路傍での演説を聴いて、大原孫三郎もまた、大変惹かれるものを感じ、この人物と話しをしてみたいと思ったのである。

東北育児院発足後の経営努力

こうして、自宅を開放して孤児3名を預かり東北育児院を発足させた五三郎は、その日その日の経営に心をくだく毎日であった。1903（明治36）年の新院舎の建築や新事業の実施にあたっては、市内篤志家の賛助を仰いで、それによって実行していった。週刊朝日編『値段史年表 明治大正昭和』によれば、巡査の初任給12円（明治39年）、東京白米代金10キロ1円59銭（明治40年）の頃、5円以上の寄付をした人が40名ほどあった。こうした人びとは、岩淵惟一、菊池定次郎をはじめとして、弘前を代表する銀行家、実業家であった（『弘前市史』の「人名録」中に登場する人も少なくない）。佐々木五三郎の生家は、父新蔵が亡くなるまでは弘前市富田町で製紙、製糸、製瓦などの工場を経営していた。さらに、五三郎の兄の死後、実家を嗣いだ五三郎は、赤格子という屋号の薬種商を弘前市本町1丁目で営んでいた（『愛成園史』6頁）、その間に培われたつきあいと信用が、こうした際に生きたのかもしれない。

しかしながら、日常の運営費は、こうした好意に頼るだけでは不足するので、森町に家を借りて薬種屋を開店、漢方薬を販売した。また、こうした薬をもって行商へも出かけた。後に育児院の園長となった佐々木寅次郎は、この頃のことを「私は学校の帰りには薬屋の番頭として活躍したのであります。此の当時、世間では佐々木のクセンコ（悪臭するので）などと言った」「行商の収益金が一番の院費になるので、院児達も毎日学校を終ると、商品をブリキカンに容れて市内の主な富田町、和徳町、浜の町、駒越町などにまわり、日の暮れ方でなければなかなか帰れなかった」と回顧している（『愛成園史』117頁）。

このように日常運営費獲得のために、薬種商・行商、篤志家の寄付金及び寄贈品募集、広告、養蚕、養豚等の事業、巡回活動写真、慈善会開催等が行われた。こうした活動によって収益を

あげるには大変な努力を必要としたし、収入も不安定なものだった。そこで、安定した事業はないものかと考えた末に、常設の活動写真館を持つことになった。こうして、1914（大正3）年9月、慈善館が開館したのであった。

常設活動写真館 慈善館の開設

育児院では1908（明治41）年から巡回活動写真を開始した。弘前市では、育児院の経営資金獲得のため、芝居小屋として市民に親しまれていた柁木座で活動写真を上映していた。1914（大正3）年、山形県酒田での活動写真巡回の際、皇太后死去のため、全国一切鳴物禁止となり興行不可能となったが、その日までの売り上げは全額育児院に送金した後だったので、帰りの旅費にも困る状態を経験した。こうしたことから、不安定な巡業から常設館設置により安定した収入の道をはかろうということになった（『愛成園史』28頁）。

山形県巡業で得た500円を元金にして、山崎国太郎所有の空き地を借り受け、同時に資金と



創立当時の慈善館（『愛成園史』より）

して山崎より1,000円（前掲『値段史年表』によれば、大正元年の巡査初任給15円、大正5年の東京の白米小売価格10キロ1円20銭）を借用、弘前市山道町に慈善館を新築した。これは、弘前で最初の活動写真常設館であり、青森県下でも2番目のものであった。佐々木寅次郎の記憶によると、大正3年8月28日に竣工、9月1日から東京日本活動写真株式会社（いわゆる日活）の特約館として開館した（慈善館開館の期日については、弘前新聞の期日と佐々木寅次郎の回顧談との間に違いがみられる、『愛成園史』123頁）。

1週目の出し物は、銭屋五兵衛、文化物、風景物であった。当時の新聞の投書欄には「僕等が活動写真に興味と云うわけではないが、

好きなだけに興業がある度に行って見る。慈善館にも開館以来数度行って見て建物の新しいのが気持ちよいが、もう少し装飾をして、荒削りの木面をかくしたらどうかと思う。又余りがらんとして味気ないし、舞台の装飾などはもっと美しく出来ないものだろうか？ 慈善館だから、慈善事業だから、それでいいではないかと言えばそれまでだが、兎に角観客を呼ぶには矢張り慈善と云う名でどうしても後はよいと云うのではなく、気持ちよく新しい写真を見せるようにすれば評判がよいと誰でも行って見たくなるもので、折角弘前にも活動写真館が出来たのだから、慈善館に今一奮発改良点に注意を望む」(『愛成園史』123～4頁)といった具合だった。

開館当初は、観客も少なかったが、4カ月目ぐらいから漸く人気が出て、開館した年の12月16日から、新派悲劇、徳富蘆花作「落下一輪」を映写したとき、初めて満員になった。慈善館ははじめ6間4尺(12.12メートル)に10間(18.18メートル)の規模であった。1915(大正4)年、陸軍特別大演習の出入(兵力3万、参観者10万)を予測して増築、屋上には尖塔をつかった。その様子を『教育史』では「大正3年8月、富田住吉通りに慈善館という育児院経営にぴたりの名をもった常設館を新築して開業した。ここには富田の師団通りにつながっていたので開業当初から繁昌し翌4年の特別大演習の出入にそなえて増築した。そのさい屋上に尖塔をのせ、毎夕そこから楽隊がジンタを流して客寄せをはじめた。それが夕空をふるわせて高くなり低くなりして市内の相当遠くまでひびきわたり、一種独特の風物詩がかもしだされていった。この常設館はたちまちにして弘前名物の一つとなり、軍隊が近いだけに日曜日の兵隊の外出日には盛況で割れんばかりの賑わいがみられた」(303頁)と紹介している。弁士は茂森町で靴屋を営んでいた安井春月であった。

日清戦争後、1896(明治29)年9月弘前に第8師団司令部が設置されることに決定、97年に入り、歩兵第31連隊をはじめとして移駐してきた。軍都となった弘前には、1903(明治36年)の段階で師団長以下将校の数約250人、その家族を伴って移住した(『弘前市史』260～8頁)。

開館当時の様子について「弘前新聞」(大正3年8月21日)は、「建物の立派なことは万事新式に則り、天井は高く風通しもよく、広さも劇場と大差なく、加ふるに電気は明るく気持ちよかりしが、写真は不準備のため5種しか映写せず何れも不鮮明の嫌いありて、充分の満足を与ふるを得ざりき」と述べている(『弘前市史』533頁)。

後に五三郎の後継者となった佐々木寅次郎は、青森県最初の映画技師の資格を取り、この映画館経営の基礎を築いた。

慈善館の好況に刺激され、土手町の寄席蓬莱亭は、1915(大正4)年の秋に活動写真の常設館に切り換え、蓬莱館と名前も改めた。16年3月には蓬莱館は閉館となったが、1917(大正6)年8月19日には大和館が開館された。1921(大正10)年には寄席の方円館が活動写真常設館となり、3館競争時代を迎えた。

そして、1924（大正13）年には3常設館の開館日数は昼興行186日、夜間1,087日、入場人員68万3,127人、この他に臨時興行、昼92回、夜16回、入場人員2万7,120人、合計71万247人の人が活動写真を見たことになる。これは、弘前市民の赤ん坊から老人まで年に一人20回活動写真を見ているという計算になる数字であった【「弘前新聞」大正14／1／26（『教育史』305頁）】。

これほどの人びとが常設活動写真館に足を運んだわけだったから、慈善館へもかなりの人が訪れたことになる。慈善館からの収入は大いに東北育児院の経営を助けたのだった。東北育児院は1936（昭和6）年、弘前愛成園と改称し、終戦後は所在地の富田安原に移転した。戦後の愛成園経営の上には、紆余曲折あり、次第に慈善館は貢献できなくなっていった。そして、慈善館は1966（昭和41）年幕を閉じた。現在では、措置費によって愛成園の経営は支えられている。

人びとの生活を支える上で、今日の制度では間に合わないところがあるとすれば、私達は石井十次や佐々木五三郎、寅次郎たちの工夫に学び、今の私達でできる工夫を創造してゆかねばとの思いを抱いた青森調査だった。

<編集後記>

社研では、昨年7月下旬、青森県下において、「日本の放射性廃棄物処理の実情と青森県」と題するテーマで夏期合宿集中研究会を実施した。日本経済が大きな転換期にさしかかっている状況下において、現地視察を通じて、日本経済（中央経済）と地域経済の関連性、および、地域経済の国際化の現状と問題点を学びとろうというのが、その大きな狙いであった。合宿研究会は、核燃料サイクル施設等の見学と聞き取りを中心に2泊3日の日程で行われ、泉所長はじめ19名の所員が参加した。

合宿研究会終了後、事務局から参加所員に対して月報への寄稿を募り、1月刊行という当初の目標は果たせなかったものの、先般執筆予定者の原稿がようやく出揃い、なんとか本号へ掲載の運びとなった（年度内刊行であれば、できるだけ執筆予定者全員の原稿を掲載したいとの編集子の願いはかなったものの、早くから原稿を頂戴していた執筆者にはご迷惑をおかけすることになってしまった。この場を借りてお詫び申し上げます）。この場を借りてお詫び申し上げます。

なお、本号に掲載の論稿のうち、養護施設訪問を下地に書かれた宇都所員のそれは、社会福祉に関するものだが、合宿研究会のメイン・テーマが上記のようなものであった関係上、本号に<六ヶ所村核燃施設視察特集>というタイトルを付すこととした。(F.T)

☆参考までに、以下に、合宿研究会での訪問先・見学施設を記しておく。

7月25日（午前）日本原燃(株)六ヶ所事業本部PRセンター
（午後）六ヶ所村立郷土館
ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物物理設センター
再処理工場、(高レベル) 廃棄物管理施設

7月26日（午前）青森県むつ小川原開発室
青森県産業技術開発センター
小林ハードウェア(株)（インテリア関連企業）
（午後）板柳町ふるさとセンター（リンゴ・ワーク）
わにもっこ企業組合

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 泉 武夫

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
